

英文講読授業活性化プラン

高 橋 守

はじめに

筆者は、昨年度から本学2年生に対して、英文講読IIの授業を担当している。昨年度は、授業で使用しているテキストのための練習問題を作成し、CALL教室のコンピュータを使ってそれらの練習問題に解答をさせ、中間・期末テストにも、それらの問題の中から出題した。授業では、その他にテキストの朗読テープを用意し、LL装置を利用して学生一人一人のテープに録音させ、自宅でも学習できるようにした。教材として用いたのは、人間と自然との様々な関わり方に関するエッセーを集めた、アンソロジー形式のテキストである。⁽¹⁾ このテキストは、本来アメリカの大学生を対象にして編まれたアンソロジーから、抜き出して作成されているため、語彙や構文的には易しくないが、内容的には十分本学の生物資源学部の学生の興味を惹くものと思われた。やる気のある学生は、授業を通してかなりの英語力がついたと思われる。しかし、下位の学生に対する指導法などの点で、授業改善を試みる必要があることが授業後のアンケートで分かった。授業方法の更なる改善のために、今年に入ってから、授業に対する学生の動機づけ、授業の展開、学期末の評価、テスト問題の作成の仕方について調べた。本稿の目的は、これらの授業改善のための新しいアイデアを提示することである。

1. 学生の動機付け

学生の授業に対する意識を知ることが、動機づけを行う上で重要である。しかし意識調査用紙の内容に関する考察は、今後の課題としたい。学生の動機づけに応用出来そうな理論には「スキーマ理論」がある。この理論によると、読み手は読解（リーディング・コンプリヘンション）において背景的知識とテキストから得られる情報の両方を活用して「読み」を行っている。従ってこの背景的知識、すなわちスキーマを活性化する活動を授業に持ち込むことで、テキスト理解を深める手助けとなるのである。⁽²⁾ 具体的には、ビデオ、DVDを使ってテキストに関係する映画を見せて、その後に読むテキストの内容を予測する活動をさせようと考えている。

2. 授業の展開

英文講読の授業とは、英文和訳の授業ではない。この信念のもとに昨年度は、教室で一度も訳文を配布せず、語句や背景的知識のみをコンピュータの画面上で学生に提示し、学生が理解したかどうかの確認は、専ら英語で書かれた練習問題の解答を頼りにした。しかし、英語の得意でない学生にとって、1時限あたり10～20ページの分量を読むことは、かなりの苦痛となったようである。教員が直接学生に話しかける時間が少なかったという反省のもとに、口頭でテキストの解説を行う時間を増やすことが必要ではないかと考えている。ところが、教員1人で20ページもの英文テキストを訳読して聞かせるとなると、限られた授業時間の中では無理である。そこで活用できそうなアイデアが、トピック文和訳である。トピック文和訳は、全文訳をしなくても全文訳と同程度に効果的に要旨を早く正確に把握させることができると言われている。理解を確かめる

小テストを、毎時間行ってほしいという要望もあったので、それも実施して行きたい。

英文を読めるようになるには、まず5000ページを読破しなければならないと言われている。⁽³⁾ほんの数百ページのテキストを授業で読ませるだけでは、不十分であり、学生が5000ページの読破に取り組んで行けるように教師が手助けをする必要がある。そのためにプリントを配って、講読テキストに関連した書籍の紹介を行う必要があると考えている。また将来的には、授業を通して読解方略（ストラテジー）を定期的に指導して行く必要があると考えている。

3. 学期末の評価テスト

(1) テスト項目とは何か？

テスト項目とは、我々がテストを作るときに学生の反応を要求する指示や質問である。我々はテスト項目作者である。⁽⁴⁾テスト項目の形式には、択一式と記述式などの様々な形式がある。さしあたり、授業で使用するテスト項目を書くために、自分が何をテストしたいのか明確にしなければならない。

(2) 特定の授業で用いられるテストはCRT である

仮に、我々が会社の採用担当係だとしよう。我々のところに学生から提出される英語の成績には、2種類ある。一つは大学の授業の英語の成績（A、B、C）でありもう一つはTOEICや英検などの成績である。どちらの成績を、その学生の能力と見ることができのだろうか？アビリティ（能力）は、発達させるのに長い時間がかかるが、アチーブメント（学力）は、教授可能かつ学習可能である。大学の成績は、その学生の能力を示しているだろうか？ある程度は、そうかもしれない。しかしながら学生の能力を示すのに都合なのは、TOEICや英検などの成績である。この理由は、大学の授業のテストとTOEICなどのテストの性質の違いによる。TOEICなどのテストは、集団基準準拠テスト（norm-referenced test: NRT）と呼ばれている。このテストの成績が表しているのは、TOEICなどを受けた全体の中でのその受験者の位置である。例えば、全体のなかでその受験者よりも成績の悪かった人が90パーセントいたならば、その受験者の成績は90点となるのである。NRTを用いれば、その学生がどのくらい英語が出来るのかを測定することが出来るため、最近ではNRTが重要視されてきている。

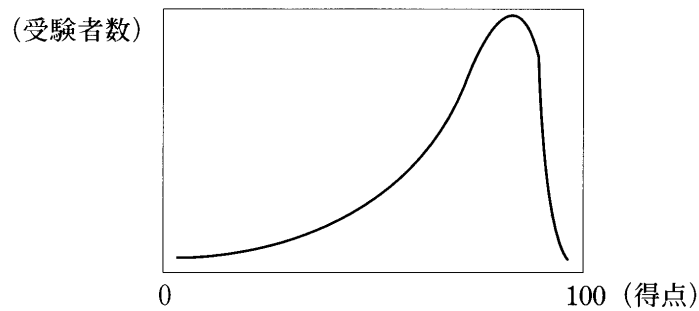
しかしながら、我々の日々の授業においてNRTを使って成績をつけることはできない。例えば、能力別に分けられた2つのクラスがあるとしよう。教科書は、上位と下位で、それぞれのレベルにあったものを使用するとする。当然下位の学生は、上位の学生とくらべて簡単な教科書を使用する。このような状況で、それぞれのクラスで成績をつけることにする。下位のクラスは上位のクラスよりも簡単なことを学んでいるからと言って、低い成績をつけられるだろうか？授業で勉強したことをどの程度理解したかをテストする以上は、下位のクラスの学生に対して恣意的に低い成績をつける訳にはいかない。このようにそのぞれのクラスで行われるテストは、目標基準テスト（criterion-referenced test: CRT）と呼ばれている。CRTは、特定の授業と具体的に關わるテストである。CRTを受ける学生の取った点数の理想的な分布は、授業以前には大多数が低い得点に偏っているのに対し、授業以後は大多数が高い得点に偏った分布を示すのが、望ましいのである。なぜならば、授業によって大部分の学生が、学んだ内容を習得していなければならないからである。CRT の得点が表しているのは、他の受験者と比べた時の全体の中の自分の位置ではなくて、ひとりひとりの受験者の習得のパーセントなのである。⁽⁵⁾

(3) 定期テストの得点分布をどう見るべきか？

ここまで見てきた通り、我々が授業に使うテストはCRTである。CRTとしての定期テストの点数を、どのように解釈したらよいのだろうか？以下のJ.D.ブラウンによるCRTの説明は、通常の定期テストの得点がどうあるべきかを示唆している。⁽⁶⁾

CRTは、特定の授業やプログラムに関わるテストである。CRTの得点分布は正規分布を描く必要はない。その理由として、もしすべての受験者が特定の授業やプログラムで学んだ学習事項を百パーセント理解していれば、すべての受験者は得点のちらばりがなく同じ得点をとるはずだからである。(p.5)

以上を要約すれば、効率的な言語の指導で学習が行なわれている場合、指導の終りの得点の分布は正規分布ではなく歪んだ分布になるということである。従って授業終了後の定期テストとしてのCRTの理想的分布は、下の図のようになる。⁽⁷⁾



4. テスト問題の作成のしかた

(1) 我々は何をテストするのか？

定期テストでは、何をテストすればよいのだろうか。テスト研究者のT.M.ハラディナによれば、我々が択一式のテストを用いる場合、つぎのような内容と心的行為（メンタル・アクティビティー）をテストするといわれている。⁽⁸⁾

- | | | | | |
|----------|------|--------|---------|--------|
| イ. 内容： | a.事実 | b.概念 | c.原則 | d.プロセス |
| ロ. 心的行為： | a.理解 | b.問題解決 | c.批判的思考 | d.創造力 |

ロ.の心的行為（メンタル・ビヘイビア）については、次のように2種類の学力に分類されている。⁽⁹⁾

- | | | |
|---------|---|---------|
| 高い種類の学力 | ⇔ | 低い種類の学力 |
| イ.批判的思考 | | イ.事実の想起 |
| ロ.問題解決 | | ロ.理解 |
| ハ.創造力 | | |

知識を与えることは、単に事実や概念や手続きの暗記をさせることにとどまらない。教師は、最終的にはより高い種類の心的行為（メンタル・ビヘイビア）をテストする必要があると考えられる。

(2) テスト項目を書くための骨組み

ハラディナによれば、我々がテスト項目を書く際の助けとなる骨組み（シェル）には例えば以下のようなものがある。⁽¹⁰⁾

理解を試す問題

...を定義するのに最良のものはどれか？

...の特徴はどれか？

...の例となるのは次の中のどれか？

批判的思考を試す問題

...にはどれが最も適切か？

どちらが良いか（悪い）か...か...か？

...に最も効果的な方法はどれか？

このプロセスでもっとも重要な手順（ステップ）はどれか？

このプロセスに不要なものはどれか？

もし...ならば、何が起きるか？

もしこれが起ったら、あなたは何をすべきか？

問題解決を試す問題

この問題の性質は何か？

この問題を解決するのに必要なものはなにか？

この問題の解決策はどれか？

(3) 択一式テスト問題 を作る際の注意事項

択一式テスト作成上の注意事項としてハラディナは、次のように述べている。

「これらの択一式問題を書く上のルールは決して破ってはならない法律ではない。テスト項目を書く際は、自分の判断で書くこと。」(p.71)

ハラディナは、どのような問題を作ったら良いのか、という我々教師の悩みにこたえて、択一式問題を作成するためのルールをこと細かく述べている。以下に訳出する。⁽¹¹⁾

内容に関するもの

1. 取るに足りない内容は、避ける。
2. 記憶を問うよりも高いレベルの思考力を問うこと。
3. 特殊すぎる知識と一般的すぎる知識は避ける。
4. 一つの事項を一種類の心的行動に基づかせる。
5. 他の事項の答えになるような問を避ける。
6. 意見に基いた項目は避ける。
7. ひっかけ問題は避ける。

形式に関するもの

1. 形式を決めたらその形式を首尾一貫して守ること。
2. 空欄完成型ではなくて質問型の形式を用いること。
3. できればベストアンサー形式を使うこと。
4. T/F (トゥルー・フォールス) 型および複雑な選択形式は避けること。
5. 水平型ではなく垂直型のフォーマットにする。

スタイルに関するもの

1. すべての事項の編集と校正を忘れずに行なう。
2. 語彙はテストを受ける人を考慮して簡単にする。
3. 正しい文法、句読点、綴りを用いる。
4. 各項目の読ませる量を最小限にする。

軸 (アクシス) となる問いの書き方

1. 軸に含まれる受験者への指示が明確であるかどうか確認する。受験者は何が問われているか正確に知るべきである。
2. 選択肢ではなく、中心的なアイデアを軸の中に入れる。
3. 余分な装飾語を避ける。
4. 否定形ではなく肯定形で書く。

選択肢の書き方

1. 出来るだけ多くの選択肢を書く。一般的に3個が我々にできる上限のようである。
2. 選択肢の中のただ一つだけが正解であることを確認する。
3. 正解の位置をあちこちと変える。
4. 選択肢を論理的あるいは数字の順序通りに並べる。
5. 選択肢が重複しないようにする。
6. 選択肢が内容的に見て同質であるようにする。
7. 選択肢の文の長さを統一する。
8. 「上のどれでもない」と「上の全部」という選択肢を入れない。
9. 「わかりません」という選択肢を入れない。
10. 選択肢を肯定文で書く。
11. 正解へのヒントになるような選択肢を書かない。
12. ディストラクター (注意をそらす不正解の選択肢) は、すべて正解に見えるように書くこと。
13. ディストラクターは生徒がよくやる間違いから探してくること。
14. それ自体は正しいにも拘わらず、与えられた文脈の中では不適切な言説をディストラクターにせよ。
15. ユーモアを含む選択肢は避けよ。

以上が、ハラディナの述べる択一式問題作成方法であるが、斎藤栄二も『英文和訳から直読直解への指導』の第19章 <英語の質問の作り方>で、問題作成のモデルを提唱している。斎藤に

よれば、英文講読の授業に於て、教師は学生に対してFinding Facts 型の英語の質問を6～7割にMaking Inference 型(What do you think ...?)とPersonal Involvement型を3～4割混ぜるようにすべきである。相手に自分の考えを伝えてゆくプロセスは、コミュニケーションの本来的な活動であるから、学生には自分の考えを相手に伝えさせることを学ばせなくてはならないと述べている。⁽¹²⁾ ハラディナと同様に斎藤もより高い種類の心的行為(メンタル・ビヘイビア)へと学生を導く必要があると考えているようである。

5. 古い英語力モデルと新しい英語力モデルについて

(1) 古い英語力モデルについて

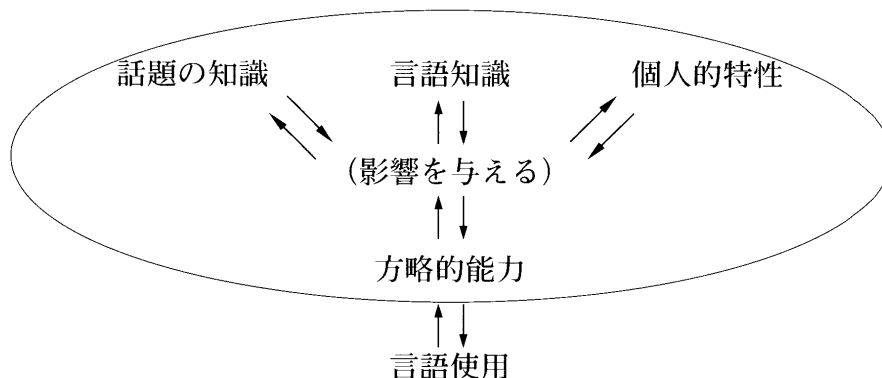
バックマン(2000)では、古い英語力モデルが次のように述べられている。⁽¹³⁾

言語能力は文法、語い、発音、綴りのような有限の構成要素の集合体と見なされていた。そしてそれらは、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能として理解されていた。(p.5)

(2) 新しい英語力モデルについて

古いモデルに対して、バックマンらの提唱する新しいモデルは「言語使用」対「言語知識」+「話題の知識」+「個人的特性」+「方略的能力」の領域間でどのようにそれらが相互作用を起こすのかに焦点をあてるというモデルである。

バックマンらが一貫して述べている言語使用上の相互作用と呼ばれるモデルは、今まで我々が思い描いて来た、個人の英語力の中味の見直しを迫るものである。バックマンらは、個人の言語能力(英語力)を記述する時に、新たに定義した要素を柔軟に結びあわせることで、より現実に近い英語力モデルを我々に提示していると思われる。このモデルは、テスト開発の過程における彼ら自身の考えを体系づけるための概念的基準であると述べられているが、彼らのモデルはテスト開発にとどまるものではない。テスト課題を授業で用いる教育用の課題と置き換えるならば、十分に応用範囲が広がると思われる。



この新しい英語力モデルが暗示しているのは、我々が教室で用いる教材は、単に文法、語彙を目指すだけではないということである。我々が教材を使って目指すのは、本物の言語使用が行なわれている世界であるべきなのであって、英文法の知識や語彙の知識だけにとどまらないはずである。またこのモデルによれば、言語使用は特定の設定における言語使用課題⁽¹⁴⁾の遂行と捉えられている。したがって、言語技能は言語能力の一部ではなくて、言語を使う能力を状況に応じ

て実現することであると考えられている。それゆえ「リーディング」は技能ではなく、リーディングの活動を含む特定の言語使用課題の遂行であると考えられている。⁽¹⁵⁾ このモデルが最近20年間の言語教授法の研究に基づいているということを考えると、明らかに今後はこのモデルの指し示す方向に注意を払いながら英語教育の研究を続ける必要があると思われる。

おわりに

本稿においては、英文講読の授業を活性化させる方法を念頭において、動機付けのアイデアとしてビデオの活用に触れ、授業の展開としてトピック文訳について触れた。次にCRTとNRTの違いについて述べると共に、授業用のテストとはCRTであること、そして学期末テストの結果として理想的な分布は、偏りのある分布であることを説明した。また英語の試験問題、殊に択一式問題を作成する際の注意事項を示した。そして最後に、我々が今後進んで行く可能性のある英語力モデルを示した。

筆者はここしばらくの間、どのようにしたらCALL教室で使用可能な練習問題を作ることができだろうかということに関心を持ち続けてきた。そのため今回はテスト関連の項目にページを多く割くことになった。今後もテストに関連する理論の応用という問題を追求したいと思うが、今後は(1)学生の学習動機を把握するために学習意識の調査票をどのように作成したらよいのかという問題、(2)リーディングの学習方略としてどのようなものを学生に教えたら良いのかという問題、(3)スキーマを活性化させる具体的な方法の問題、等にも取り組んで行かなければならないと考えている。

【註】

- (1) Scott Slovic編 *Worldly Words* (ふみくら書房、1995)
- (2) 「2. スキーマを活性化させるリーディング指導」『英語リーディング事典』(研究社、2000:201-219)
- (3) 斎藤栄二『英文和訳から直読直解への指導』(研究社、1996:129)
- (4) Thomas M. Haladyna *Writing Test Items to Evaluate Higher Order Thinking* (Allyn & Bacon, 1997:10)
- (5) J.D. ブラウン 『言語テストの基礎知識』(大修館、1999:163)
- (6) 引用のページ番号は、ブラウン (1999) のもの。
- (7) ブラウン (163)
- (8) Haladyna (69)
- (9) Haladyna (32)
- (10) Haladyna (68)
- (11) Haladyna (72-92)
- (12) 斎藤 (170)
- (13) L.F.バックマン、A.S.パーマー『実践言語テスト作成法』(大修館、2000)
原著は、*Language Testing in Practice* (Oxford University Press, 1996)
- (14) 言語使用課題 (language use task) = (定義)「特定の状況において特定の目標や目的を達成するために個人に言語を用いさせる活動。」バックマン (50)
- (15) バックマン (87-88)